

「がん診療レジデントマニュアル」

国立がんセンター中央病院内科レジデント 編集

国立病院四国がんセンター外科

高 嶋 成 光

20年前、乳癌外科を専攻することを命じられて、国立がんセンターで2か月の研修を受けた。その当時から国立がんセンターのレジデント制度は充実しており、若いレジデントの潑刺とした活躍に圧倒されたことを鮮明に記憶している。

この研修で、臨床腫瘍学の重要性を教えられ、参考書の1つとして紹介された「UICC: Manual of Clinical Oncology」がそれ以来筆者の座右の書となり、改訂ごとに購入してきた。しかし、内容は充実しているものの、常に携帯してベットのサイドで活用するには少々不便を感じていた。

今回、国立がんセンター中央病院内科レジデントの先生方が渡辺亨医長の指導の下に「がん診療レジデントマニュアル」を出版された。ポケット版、291頁の本書は白衣のポケットに納まる取り扱いの便利さとともに、最先端の内科腫瘍学全般がコンパクトにまとめられており、まさに筆者が待ち望んだ書と言える。

その内容は、インフォームド・コ

ンセントと癌告知に始まり、癌化学療法の基本概念、癌化学療法時の支持療法、緩和医療、臨床試験などの総論と、各論として、肺癌、乳癌、胃癌、食道癌、大腸癌、肝臓癌、胆道癌、膵癌、卵巣癌、小児癌、悪性リンパ腫、白血病が取り上げられている。それぞれの癌腫について、疫学、診断、組織分類、Staging、予後因子、治療、予後に分けて簡潔に記載されている。とりわけ治療に関しては、手術療法、化学療法、放射線療法の適応決定のための指針が明確に示されており、初回治療から再発後の対応までそれぞれの時期に応じた国立がんセンターの標準的治療が具体的に記載されている。特に化学療法は国内外の臨床試験によって科学的に妥当と認められたものが取り上げられており、抗癌剤の選択、投与方法、有害事象への対処まで詳細に記述されている。これらは本邦における標準治療として一般臨床で患者さんに勧めてよいものである。

付録の抗癌剤とその略号、体表面積算定表や19項目のMemo、裏表

紙に掲げられたJCOG副作用判定基準など日常臨床で使用頻度が高いものが即座に確認できるなど、随所に細やかな配慮がみられる。

本書には本邦では少ない腫瘍内科医 (medical oncologist) の癌医療にかける誇りと使命感が脈打っている。いまだ多くの癌腫が手術から補助療法、再発治療まで外科医によって手がけられている現状では、直ちに受け入れられない点もあろう。しかし、癌に病む患者さんにとって外科流、内科流治療はあってはならないことであり、より良い標準的治療の確立のために癌医療体制を変革しなければならない時期に来ている。この意味でも本書は内科研修医のみならず外科研修医にとっても、日々の癌診療の場で活用できる書であり、また、癌外科医やこれから癌医療を目指す医学生、医療従事者にもぜひ勧めたい1冊である。

● B6変 頁296 図20 表60 1997
定価 (本体 3,800円 + 税) 円400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)